取 組 名	伊佐地区合同防災訓練		
特　　徴	美祢市伊佐地区の幼稚園・保育園・小学校・中学校の伊佐保育園、伊佐中央幼稚園、伊佐小学校、伊佐中学校の合同による総合防災訓練		
学 校 名	美祢市立伊佐中学校	期日	令和2年11月26日(木曜日)

1　ねらい

○　地震が発生した際、生徒の安全確保を第一に、迅速かつ的確な対応ができるなど、訓練を通して生徒・教職員・地域住民の安全に対する意識や危機対応力を高める。

○　幼稚園・保育園・小学校・中学校及び地域住民等による連携した実践的な訓練により、生徒が自らの安全を確保しつつ他者にも気を配り、必要に応じて協力し合うことの大切さを学ばせる。

2　概要

(1)取組内容

伊佐地区の幼稚園・保育園・小学校・中学校の合同総合防災訓練は、小学校・中学校の合同の学校運営協議会が発足し、小中連携の取組を進める中で、地域全体の防災に対する意識の高揚や危機対応力を高めることを目的として、２年前から実施している。大規模で広範囲の地震が発生し、本校も校舎の一部が損壊し、身の安全確保を図るためグラウンドへ避難することを想定して訓練が行われた。近隣の幼稚園・保育園・小学校は、更なる土砂崩れの可能性があることから、二次避難場所である本校へ避難することとなり、要請を受け、伊佐小学校児童、伊佐保育園・伊佐中央幼稚園園児の避難を受け入れる想定で、訓練を実施した。避難訓練後には、日本赤十字社の講師による防災講演会を実施し、地震等の災害時の対応や防災に関する知識について学んだ。

(2)当日の流れ

13:15　地震発生
13:20　本校生徒がグラウンドへ避難
13:25　伊佐保育園園児がグラウンドへ避難
13:40　伊佐小学校児童、伊佐中央幼稚園園児がグラウンドへ避難
13:45　全体指導
・幼稚園・保育園・小学校・中学校の全員が集合した後、全体指導、避難訓練の講評を行った。
14:00　防災講演会
・地震等の災害時の対応等についてのＤＶＤの視聴と講話が行われた。
14:30　閉会行事
14:50　避難訓練の振り返りの記入

中学生が保育園児を誘導する様子

小学生が幼稚園児を誘導する様子

全員避難後の様子

3　成果と今後の課題等

(1)成果

今回の訓練では、小学生が幼稚園児を、中学生が保育園児を、避難場所まで誘導する場面が設定され、年上の子どもたちが、年下の子どもたちに声かけをしたり、手を取って誘導したりする姿が見られた。実際に地震や津波等の災害が起こったとき、子どもたちが、自分自身だけではなく、周囲にも気を配り、協力し合いながら避難することが大切であることを学ぶことができたと思われる。

(2)課題

本訓練には、例年であれば、地域住民の方々にも参加していただき、避難訓練後の防災講演会については「非常リュックの作成」等の体験活動を取り入れた内容であったが、今年度は、新型コロナウイルス感染症予防対策のため、規模を縮小しての開催となり、講演会についても、体験活動は実施せず、講話のみの内容となり、実践的な訓練という点では、課題を残した。今後、感染症の状況にもよるが、防災訓練の在り方や内容について、今一度、鋭意検討していき、より実践的な訓練を仕組んでいきたい。

取 組 名	小中合同防災訓練（火災避難訓練・起震車による地震体験訓練）		
特　　徴	埴生地区自治会協議会・山陽小野田市役所危機管理室共催による防災訓練		
学 校 名	山陽小野田市立埴生小中学校	期日	令和2年11月18日(水曜日)

1　ねらい

○　火災が発生した際、身の安全確保を第一に落ち着いて、迅速かつ的確な避難ができるよう訓練を通して児童生徒・教職員の安全に対する意識や危機対応力を高める。

○　自治会協議会・行政機関との連携による起震車体験を通して、地震の恐ろしさを体感するとともに、地震災害に対する認識を深める。

2　概要

(1)　訓練の経緯

本校は令和２年４月に小中一貫校としてスタートし、現在は生徒棟改修工事もあり、小中学生が同じ児童棟で学校生活を送っている。そのようなメリットを生かし、この度初めての小中合同防災訓練（火災避難訓練）を計画したところ、埴生地区自治会協議会の協力が得られることになり、協議会の仲介で市危機管理室とも連携し、起震車体験を含めた地震防災訓練も併せて実施することとなった。

(2)　訓練の流れと児童生徒の動き

①　火災放送傾聴
教員の指示に従い、落ち着いて最後まで火災発生及び避難を促す放送を聞く。

②　避難準備・避難指示
避難に備え、教室のカーテン、戸締まりを確実に行う。その後、決められた経路に従い、上履きのまま「無言、安全、迅速」にグラウンドに避難する。

③　グラウンドへの避難及び整列・人員確認
教員の指示に従い、本部に向かって学級毎に整列し、点呼を行う。

④　全体指導（校長講評）
指導講評を聞きながら、自身の避難行動について振り返る。

⑤　起震車体験
各学年４名を代表として、起震車による地震の揺れを体験する。

⑥　自治会協議会長講話
会長自身の経験に基づく災害講話を聴き、防災に対する関心を高める。

⑦　防災食の配布
防災食（乾パン）が自治会協議会から提供されていることを知り、感謝して受け取る。

校舎内での冷静な避難

グランドで整列･点呼難

起震車による地震体験

協力関係者への挨拶

3　成果と今後の課題等

小中合同でしかも地域や行政機関との連携による防災訓練が実施できたことは、児童生徒にとって大きな学びになったと思われる。特に、起震車体験は貴重なものであり、地震災害　の恐ろしさを体感するとともに、防災や減災に対する関心の高まりへと少なからず繋がった　ものと信じている。

今後の課題としては、児童生徒に身に付けさせたい防災力である、①自らの命は自ら守る意識と行動力の育成、②災害に対する正しい知識と技能の習得、③規律ある集団行動の体得④自他の生命尊重を基盤とし、自ら安全に行動する力の育成等をより一層効果的に進められるよう、学校・保護者・地域住民・関係機関との連携強化を通して、防災に対する学びの場経験の場の充実を図っていきたい。

取 組 名	日時等を事前に告げない避難訓練（火災・管理職不在）		
特　　徴	小中一貫教育校として、小学部・中学部合同で実施		
学 校 名	萩市立福栄小中学校	期日	令和2年11月13日(金曜日)

1　ねらい

（職員）

○　火災発生時、様々な情報を基に冷静な判断を下し、安全な方法で児童生徒を避難させることができる。

○　施設管理者（校長）や防火管理者（教頭）が不在の状況下で、それぞれ居合わせた教職員で役割分担を行い、組織として統一した行動ができる。

（児童生徒）

○　火災を発見したら、大人に大きな声で通報し、指示に従って安全に避難できる。

○　教職員不在時は、自ら判断し下級生を安全に誘導できる。

2　概要

（1）事前学習等

今回は、火災を想定し、実施日時等を事前に告げない形で実施した。児童生徒や教職員に対して事前に周知した内容は、次のとおりである。

①　教職員には、避難訓練の大まかな流れと併せて、管理職（校長・教頭）が不在であるという状況設定の下で実施することを周知。また、火災発生時の対応（防災監視盤の操作、放送や通報の仕方、どのような役割分担が必要か等）について、事前研修を実施。

②　児童生徒に対しては、避難訓練が実施されることの周知に加え、避難を行う際にポイントとなる事項について事前学習を実施。

※　実施日、実施時間、火災発生場所等については、管理職と消防署員以外には事前に知らせなかった。

【避難の様子】

（2）当日の流れ

１０：０８　中学部２年教室前で火災発生
１０：０９　火元確認
１０：１０　校内放送、１１９番通報、避難開始
１０：１２　避難完了
１０：１５　萩消防署からの指導講話
１０：２５　感想発表（生徒２人、教員１人）
１０：２８　校長講評

【消防署からの指導講話】

3　成果と今後の課題等

（1）成果

全体的に、児童生徒、教職員ともに緊迫感をもって真剣に訓練に臨むことができた。しかし、今回は実施日時等を事前に告げない形で実施したこと、管理職不在の状況を想定して実施したことにより、居合わせた教職員がその場で状況判断し、通報、避難、消火の各活動を行わなければならなかったため、主に教職員側の動きにミスが多く目立ち、消防署の方から様々な指摘を受ける結果となった。

本校では、これを今回の訓練の最大の成果であったと捉え、今後明確となった課題を解決していけるよう対策を講じていきたいと考えている。

（2）課題

前述したように、今回の訓練では教職員側の動きに大きな課題が残った。消防署からは、「教職員は企業で言えば従業員であり、人命と財産の両方を守る必要がある。」との指導を受けた。初期消火や財産の持ち出し等にまで気が及ばなかったこと、教職員が大きな声で指示や自分の行動を知らせることができなかったことなどの反省点を今後に生かしていきたい。

取　組　名	Ａ：防災学習、Ｂ：小中合同避難訓練（大雨・土砂災害）		
特　　徴	Ａ：居住地域のハザードマップの活用、Ｂ：災害の想定を考慮した動きの実践		
学　校　名	長門市立深川中学校	期日	Ａ：令和2年 7月16日(木曜日) Ｂ：令和2年11月 9日(月曜日)

1 ねらい

Ａ　生徒の居住地域の大雨による浸水や土砂災害等に対する理解を深めるとともに、正しい知識を身に付け、正しく対応することのできる危険予知能力の向上を図る。

Ｂ 大雨による浸水や土砂災害等に対する理解を深めるとともに、正しい知識を身に付け、正しく対応することのできる実践的対応能力の向上を図る。児童生徒を安全に避難誘導する教職員の能力を向上させるとともに、災害発生時に小・中学校が連携し、生徒が児童を安全に避難誘導する能力を身に付ける。

防災学習の様子

2 概要

(1) 取組の経緯

Ａ 今年度、大雨の時期の前に避難訓練を予定していたが、新型コロナウイルス感染防止対策の観点から1学期のすべての学校行事について全校で集合することを避けていたため、各教室で実施可能な防災学習を実施することとした。

Ｂ 5年前に小学校が浸水したこともあり、地盤の高い中学校へ避難する訓練を毎年行っている。

(2) 取組内容

Ａ 大雨による洪水に伴う避難情報や避難時の注意点、ハザードマップの活用の仕方などを動画で確認した上で、長門市防災危機管理課の方にお願いをし、市内5地区のハザードマップを活用して地区ごとのグループを作り、洪水・土砂災害に関して居住地周辺の防災情報を確認した。

Ｂ 近くの川が大雨により氾濫する可能性がある想定で、生徒の避難と合わせて児童が地盤の高い中学校へ避難する際の誘導の訓練を行った。体育館では狭いため、グラウンドで防災危機管理課の地域防災マネージャーを講師として招聘し、学校周辺の防災の観点から見た特性と注意点の講話を実施した。

小・中学校合同での訓練の様子

3 成果と今後の課題等

(1) 成果

Ａでは、市内の全戸に配付されているハザードマップを見たことのない生徒も多く、周辺の地域の防災情報を確認し、家庭での話題とすることができた。生徒によっては、周辺の土砂災害が起こりそうな場所や避難場所が意外に離れている点、動画で確認した避難場所までの途中の経路に潜む危険性などをグループで話し合うことができた。

Ｂでは、児童及び生徒とも教職員の適切な指示により、安全に短時間で避難することができた。特に、少し離れた距離にある小学校からの避難は、誘導の生徒が慌てるほど早く到着するクラスもあり、日頃の指導が十分に行き届いていることを感じた。また、講師の方からの周辺の地形を踏まえた防災に関する講話（講師の方が事前にドローンで上空から撮影）は、小・中学生にとってためになる内容であった。

(2) 課題

ハザードマップの上では居住地域周辺の防災情報は確認できたが、現場に行って再確認したり、避難場所までの経路を家族や地域の方と確認したりということまでは実施できていない。学校だよりや地域協育ネット等の場で実施を呼び掛けるなど実践に結び付ける必要がある。

また、中学校では立地場所の関係から生徒の引き渡し訓練が行えていない。小・中学校合同での児童・生徒引き渡し訓練の実現に向けて、そのシステム作りから小・中学校で連携してシステムを構築し、両校の教職員にそのシステムを周知する必要がある。

取 組 名	通学路合同安全点検		
特　　徴	学校・PTA・学校運営協議会・学校応援団・柳井市教育委員会・柳井警察署・県土木課・市土木課・地域住民代表による通学路合同点検		
学 校 名	柳井市立柳井南小学校	期日	令和２年８月３日(月曜日)

１　ねらい

〇地域・PTA・教育委員会・関連機関等と合同で点検を行うことで、児童がより安全に登下校できるよう、地域住民や教職員の安全意識の向上を図る。

〇実際に歩いたり、児童や地域の方の声を聞いたりすることで、現状を知り、より実効的な安全を確保できるようにする。

〇児童が登下校時における危険箇所を把握することで、児童の安全意識を高める。

２　概要

（１）取組の経緯

本校児童は阿月地区のバス通学と、伊保庄地区の徒歩通学に分かれている。県道柳井上関線は道路幅が狭い上に交通量が多い。また、歩道も整備されていない箇所も多くあり、登下校時の安心・安全面に課題がある。そこで、まず児童と共に通学路の安全点検を行い、次にそれを元に、学校と地域・関連機関等で通学路の合同点検を実施し、改善に向け共通理解を図った。

（２）取組内容

・保護者や登下校見守り隊の方から「児童の登下校に不安を感じる」と連絡が入り、教職員が一緒に通学路の危険箇所を確認。

・児童と共に、通学路の安全点検を実施。（保護者からも情報収集）

・教育委員会に報告し、警察との合同点検を依頼。

・路側帯拡張やカラー舗装、横断歩道の設置を要望。

・学校運営協議会・PTA・地域・住民代表・教育委員会と連絡調整をし、合同点検日を決定。

（３）当日の流れ

１０：３０～	通学路合同点検参加者集合 打合せ（目的と点検箇所）
１０：４０～	八幡団地入り口～賀茂神社 点検開始・改善策への意見交換
１１：３０	通学路合同点検終了 今後の取組の見通しについて確認

３　成果と今後の課題等

今回、児童と共に通学路の安全点検を行うことができ、安全意識を高める良い機会となった。また、地域やPTA・関連機関と連携をとることで、共通理解が進み、早期の対応につながった。通学路合同点検後、昨年度の要望で路側帯の一部がカラー舗装された。そのことで、児童とドライバーの注意喚起になった。しかし、路側帯の拡張は難しく、児童の通学に不安が残る。また、横断歩道の設置も困難で、特に低学年児童の道路横断が危惧される。連携を継続し、児童が安心・安全に学校生活が送れるようにしていきたい。

児童との通学路点検

通学路合同点検の様子

カラー舗装された路側帯

取 組 名	地域連携地震・津波避難訓練（全校児童）		
特　　徴	三蒲小学校・三蒲地区コミュニティの合同避難訓練		
学 校 名	周防大島町立三蒲小学校	期日	令和2年11月27日(金曜日)

1　ねらい

○　地震及び津波警報発令時の基本的行動様式を理解し、状況に応じて地域の方と共に安全に避難することができる。

地震だ!机の下に避難

2　概要

(1) 取組の経緯

本校は５年前から、年１回三蒲地区コミュニティと合同で地震・津波に対する避難訓練を実施している。３年前、蒲野保育所が閉所したため、幼児の参加は無くなったが、地域の防災組織と連携して実施している。

(2) 取組内容

授業中、震度５以上の身体ではっきりと分かる地震が発生、教室内での対応及び津波警報発令による校内避難を実施する。三蒲地区町指定避難所としての蒲野農村環境改善センター(以下 蒲野センター)への移動を地域住民と連携して安全に行う。

避難場所に集合

(3) 当日の流れ　〈三蒲小学校・蒲野センターで実施〉

10:20　放送によって、地震発生時の対応訓練を知らせる。
10:22　ベル(地震発生の合図　鳴動10秒　5秒後　再鳴動5秒)
　　その後、放送で津波警報発令による緊急避難を指示する。
10:25　避難(運動場で地域の方と合流)　運動場移動後、蒲野センターに避難
10:40　終わりの会　校長挨拶、地域代表挨拶、消防署指導講話
　　防災倉庫見学
　　学校に帰って振り返り

三蒲地区避難場所へ移動

3　成果と今後の課題等

(1) 成果

今年度は、新型コロナウイルス感染症のため、開催が危ぶまれたが、予防対策を行い無事実施できた。当日は、地域から 11 名の参加があった。

【児童の振り返りより】

・避難するとき「お・は・し・も」を守って上手に避難することができた。
・津波の時には、とにかく上の方に逃げようと思う。
・先生の話や地域の人の話をよく聞けば、安全に避難することができるので聞き逃さないように頑張って聞いた。
・自分の命を守れた時、友達や家族の命も守ろうと思った。みんなと協力して避難しようと思った。

消防署の指導講話

(2) 課題

地震の発生が必ずしも学校にいる時だけに限らないので、在宅時に地震発生、その後学校への避難というような設定を考え、学校の受け入れ態勢や地域の方の役割分担を明確にするための訓練も必要である。また、新型コロナウイルス感染症蔓延時の避難なども視野に入れて訓練することも大切である。また、避難所の蒲野センターの海抜が低いこともあり安全で海抜が高い位置の避難場所も考慮していくことも課題である。

終わりに「自分の命は自分たちで守る」という意識と実践力を地域の方と共に高めていきたい。そのためにコミュニティスクールの機能を更に充実させて、地域の方とのふれあいの中で学べる場の設定をさらに工夫していきながら、より実効性のある活動を仕組んでいきたい。

防災倉庫の見学

取 組 名	守れ、自分の命！みんなの命！		
特　　徴	全校児童、全保護者		
学 校 名	周防大島町立森野小学校	期日	令和2年6月26日(金曜日) 令和2年8月 5日(水曜日)

1　ねらい

○　夏休みを前に、毎年全保護者を対象に救命救急法（AED講習会）の演習を行うだけでなく全校児童43名も自分でできる救急法を学ぶ機会とする。

○　児童集会活動「のびのび活動」での全校児童を対象とした長浜海岸での水泳学習の機会に着衣水泳を体験し、緊急の場合での「命を守る」心構えを確認し、身に付ける。

2　概要

（1）AED講習会

新型コロナウイルス感染防止対策として、「3密」を回避しながら全児童と保護者を対象としたAED講習会を体育館で実施した。日本赤十字社より講師を招聘し、「心肺蘇生トレーニングツール」を活用して少人数（5～8人）で実践的なトレーニングを行った。

AED講習会の様子

（2）着衣水泳

学校の近くにきれいな長浜海岸がある利点を生かし、毎年海岸を活用しての水泳学習を実施している。その機会を活用して着衣水泳を行い、緊急時にいかに活動しにくいのか、また、空きペットボトルがどのように有効かを体験している。

着衣水泳の様子

3　成果と今後の課題等

（1）　成果

・本年度、新型コロナウイルス感染防止対策の一環として学校での水泳指導は行わなかった。しかし、夏季休業を中心に子どもたちは校区内にあるきれいな海岸で、海水浴を楽しむ機会はたくさんあり、AED講習会を毎年体験実施し、改めて「命の大切さ」について学ぶ機会は重要であると考え実施している。保護者だけでなく、子どもたちも異年齢集団で取り組ませることにより、上級生が下級生を優しく、励ましながら支援している姿が見られ、自他の「命を守る」という意識向上に確実につながっている。

・毎年、継続実施することで子どもたちにできる救命救急活動を理解し、できること・できないことの区別が明確になり、周囲の大人たちへの救助要請のタイミングを高学年児童は
把握できるようになってきている。

（2）　課題

・新型コロナウイルス対策として、3密を避けて広い場所で、大きな声を控え講習会を行う必要性は、次年度以降も考慮しなければならない。

・ペットボトル以外、子どもたちの身近にある物を教員だけでなく、子どもたち自身に考えさせ発見させていく必要がある。

取 組 名	緊急時下校訓練		
特　　徴	引き渡し登録カードに掲載されている人を確認しながら、全児童の引き渡しが完了するまで実施する緊急時下校訓練		
学 校 名	田布施町立麻郷小学校	期日	令和2年11月19日(木曜日)

1　ねらい

〇　災害や凶悪事件等の発生により児童の安全確保が最優先される場合の下校方法を訓練することにより、児童を安全かつ確実に保護者へ引き渡すことができる仕組みと校内体制の確立を図る。

訓練の様子

2　概要

(1)　取組内容

校区内で傷害事件が発生し犯人が逃走中であるという設定で、緊急メールで保護者へ迎えを要請する。校内への車の出入りを一方通行として、スムーズに流れるように周知する。事前に提出済の「引き渡し登録カード」で迎えに来た人を確認しながら児童の引き渡しをしていく。今回は、終了時刻を設定せずに、全児童の引き渡しが完了するまで訓練を行う。

(2)　事前準備

・「引き渡し登録カード」を保護者に配布し、引き渡しが可能な人を登録していただく。
・緊急時下校訓練の実施についての文書を保護者に配布する。
・訓練の実施について、児童クラブやスポーツ少年団等の関係団体へ通知する。
・道路が車で混み合う可能性があるので、近隣自治会に訓練についての文書を配布する。

(3)　当日の流れ

14:00　事件発生
14:05　対策本部設置　入口・門の施錠
14:10　対策本部で協議
14:15　学年主任招集　各クラスへの周知
　　保護者への緊急メールを配信
　　体育館準備　駐車場準備(運動場)
14:25　児童下校準備
14:30　児童の体育館への移動開始
14:45　車両誘導　校舎施錠
15:00　児童の引き渡し開始
16:00　待機児童の図書室への移動開始
　　保護者への引き渡し場所変更のメールを配信
16:05　図書室にて児童の引き渡し
　　全員の引き渡しが完了したら保護者へメールを配信

体育館にて引き渡し

3　成果と今後の課題等

(1)　成果

今回は、「引き渡し登録カード」をもとに、できるだけ緊急時の状態に近い形で実施したことで、教職員の対応力を高めることができた。保護者の車の出入りも、一方通行を守りスムーズにできていた。緊急時の動きの流れを、児童・教職員・保護者がしっかりと確認できたことが一番の成果といえる。

(2)　課題

運動場を駐車場とすることで、ライン引き等に時間を要する。混雑を避け、スムーズな引き渡しを行うためには、会場準備等の時間を考慮し、保護者への緊急メールを送信するタイミングと、引き渡しを開始する時刻の設定をしっかりとする必要があると感じた。また、職員の的確な役割分担の重要性を再確認することができた。

全児童の引き渡し完了が１８時３０分を過ぎていた。待機する児童や保護者の負担を考え、今回のように全児童の引き渡しが終了するまで行う訓練は、隔年実施でもよいかもしれない。来年度に向けて検討が必要である。

取 組 名	水害に備えたAR防災体験学習と避難訓練～早めの避難はなぜ必要か？～		
特　　徴	山口県防災危機管理課と連携したAR防災体験学習とその学びを生かした避難訓練の実施		
学 校 名	周南市立三丘小学校	期日	令和2年11月16日(月曜日)

1　ねらい

○　防災体験をAR機器（「Augmented Reality（＝拡張現実）」を体験できるゴーグル）を用いてバーチャルに体験することで、実感をもって防災について考え、水害で被害が出る前に早めに避難することの必要性に気付くことができるようにする。

○　AR防災体験学習で得たことについて、当日実施する避難訓練において全校で共有し、全校児童が水害への対応について学ぶことができるようにする。

2　概要

（１）AR防災体験学習

山口県防災危機管理課防災企画班から２名の講師を招き、AR機器を利用したAR防災体験学習を実施した。参加した児童は、５・６年生の９名である。

はじめに、AR機器の使い方について説明があり、その後すぐ体験学習が始まった。体験は３段階で行われ、第１段階は水が５０cm浸水した状態で半透明、第２段階は５０cmの浸水で不透明（濁っている）、第３段階は更に木や枝などの漂流物が流れてくる。体育館の床には、障害物の目印となるパネル等が置いてあり、児童は第１段階では動きにくいが上手に障害物を避けて移動できた。しかし、第２段階になると、ほとんど周りが見えず、なかなか前に進めなかった。講師から傘を渡され、それを杖として周りを確認しながら進んだが、動きは遅かった。第３段階になると、流れてくる漂流物に対して思わず避けたり、手を伸ばしたりしていた。「うわー！」「こっち来ないで！」など大声を出す児童もおり、ゴーグルを外すと「怖かった～」とつぶやく声も聞こえた。

AR 機器で浸水した中を進む体験中

体験の後は、講師から２年前に大雨で浸水した学校近くの場所が写真で紹介され、浸水による避難の難しさが伝わった。

（２）避難訓練（水害）

同日の午後、水害による避難訓練を実施した。朝からの大雨で、近くの島田川に氾濫警戒情報が発表されたという想定の下、緊急に下校するため全校児童が体育館に集まる訓練である。緊急放送の直後から児童は下校の準備を開始し、各学級がまとまって静かに体育館に集合した。なお、３密を避けるため、ドアや窓は開放し、間隔を空けて並んだ。

その後、午前中に５・６年生が体験したAR防災体験学習の様子をビデオで視聴し、参加した６年生がそのときの感想を発表した。

体験学習の様子をビデオで視聴

3　成果と今後の課題等

最新の技術を用いることで、体験学習に参加した児童は擬似的に浸水の恐さを体験し、浸水後の避難の難しさについて、身をもって感じることができた。また、同日に避難訓練を行うことにより、５・６年生だけでなく全校で体験学習の学びを共有することができた。

一方で、今回は学校運営協議会の委員が１名体験学習に参加したが、コロナ禍のため、地域との合同避難訓練を実施することはできなかった。今後、地域や保護者との連携を高めるため合同の避難訓練を可能な範囲で実施し、災害への備えを万全にしていきたい。

取 組 名	久保の町安心・安全マップ作りに向けたフィールドワーク（6年生）		
特　　徴	安心・安全マップ作りに向けた、6年生と地域の方が協力した危険箇所の調査		
学 校 名	下松市立久保小学校	期日	令和2年10月29日(木曜日)

1　ねらい

○　通学路において、交通安全、防災、防犯の視点からの危険箇所を調べ、全校児童が安全に登下校できるようマップを作る活動を通して、子どもの安全に関する意識の向上を図る。

○　地域の方といっしょに危険箇所を調査することで、子どもの視点だけでなく大人の視点を取り入れたマップを作るとともに、地域の方の安心・安全な町づくりに対する意識の向上を図る。

地域の方との打ち合わせ

2　概要

(1) 単元計画

本学習を行うに当たり、以下のような単元の計画を立てた。

第一次　久保の町のためにできることを考える。
第二次　安心・安全マップ作りの計画を立て、調査、作成を行う。
第三次　できあがったマップを活用して、全校児童に安全な登下校を呼びかける。

フィールドワークの様子

(2) 取組内容

最初に、久保の町のためにどんなことができるかを話し合った。５月末に学校が再開して以来、「人のため」の活動がほとんどできなかった。最高学年として、何か地域のためにできることはないかと話し合った結果、交通安全、防災、防犯の３つの視点からの「安心・安全マップ」を作ろうということが決まった。マップ作りにあたり、地域を６年生全員で歩いたが、詳しく調べるためには、自分たちの力だけでは難しいことに気づいた。そこで、地域の方に協力していただき、地区ごとに分かれてじっくりと危険箇所を調べることとなった。マップは今年中に完成予定であるが、活用の仕方についても、校内だけでなく地域の方にも見ていただけるよう考えている。

マップ作りの様子

(3) フィールドワークの様子

当日は、8つの地区に分かれ、2時間を目安にフィールドワークを行った。グループごとに地図をもち、気づいたことを書き込みながら歩いた。普段自分が通う通学路とは違う場所を歩いた児童は、日頃歩く児童とは違った視点での気づきがあり、地図に多くの書き込みをしていた。いっしょに歩いてくださった地域の方だけでなく、途中で出会った地域の方からいただいた意見も取り入れることができ、実り多いフィールドワークとなった。

3　成果と今後の課題等

(1) 成果

自分たちで実際に通学路の様子をじっくりと調べることで、これまで気づかなかった危険を発見することができた。また、地域の方に参加していただくことで広い視野からの充実した活動ができた。学校と地域とが共に町の安心・安全を考え、共有できたことは、今後の町づくりにもつながると考える。

(2) 課題

まだ、マップは作成中である。今後、活用の仕方を考えると共に見直しを図ることで、今年度限りの取組に終わらないようにしていきたい。

取　組　名	感謝集会・交通安全実践委員会		
特　　徴	地域のスクールガードボランティア・交通指導員・見守り隊との連携		
学　校　名	下松市立東陽小学校	期日	令和2年10月28日（水曜日）

1　ねらい

日頃お世話になっているスクールガードボランティア・交通指導員・見守り隊の方とのふれあいを通して、感謝の気持ちをもたせるとともに、登下校について自分の様子を振り返り、交通安全や防犯に対する意識を高める。

2　概要

（1）感謝集会

・スクールガードボランティア・交通指導員・見守り隊の方の紹介
・児童代表の言葉
・お礼のプレゼント渡し（全校児童の手紙）
・スクールガードボランティア・交通指導員・見守り隊の方からのお話
・校長先生のお話
・おわりの言葉
・スクールガードボランティア・交通指導員・見守り隊の方の退場
※感謝集会の後、一斉下校を行った。
※学校での交通安全の取組を理解してもらうために、ＰＴＡ育成部の役員も参加した。

児童代表あいさつ

お礼の手紙渡し

お礼の手紙

（2）交通安全実践委員会

・学校安全アドバイザーをお招きして、スクールガードボランティア、交通指導員、見守り隊、久保中学校・久保小学校・本校交通安全担当教員で、児童の登下校の様子・校区内の防犯について話し合った。
・良い点
→集団登校班の態度の良さ
保護者の見守り
・課題点
→「一旦停止」「左右確認」の徹底
街灯の設置

グループでの話合い

学校安全アドバイザーの話

3　成果と今後の課題等

○　「集団登校時、高学年が下学年の世話をする姿をよく見かける」「横断歩道を渡ったとき、運転者に対して必ずお辞儀をしている姿が気持ち良い」というお話がスクールガードボランティアの方からあった。いつも見守ってくださる方からのお話によって、児童は安全意識や感謝の思いをもつことができた。

○　今後も、地域の中で守り育てられていることを知る体験を意図的に設定することで、人とのつながりを大切に感じる心や感謝の気持ちを育てる機会として継続したい。地域の見守り隊の方の高齢化が進んでいるので、ＰＴＡと連携しながら見守り活動を支える必要がある。

取 組 名	日時等を事前に告げない避難訓練		
特　　徴	日時等を事前に告げない避難訓練を実施し、児童・教職員が安全迅速に避難する基本的な行動を実践的に身に付ける。		
学 校 名	光市立塩田小学校	期日	令和2年7月30日他

1　ねらい

○　非常災害等の発生に際して、安全迅速に避難する基本的な行動を身に付け、お互いに協力し合って生命を守ることの大切さを理解し実践する。【児童】

○　非常災害等の発生に際し、教職員の連携をスムーズに行うとともに、的確かつ速やかに判断し児童の安全を確保する。【教職員】

2　概要

⑴日時等を事前に告げない避難訓練

これまでの避難訓練の課題として、決められたルートで教員の言われた通りに避難していた児童が、いざという時に自分で考え判断し迅速かつ安全に避難できるのか、また、教職員は情報を察知し自らが判断し的確な指示を児童に伝えられるか、緊急対処の方法を実行できるか等挙げられた。そこで、年間３回の日時等を事前に告げない避難訓練と専門家等と連携した防災授業や安全教室を計画的に行い、より実践的な危機管理能力を身に付けることとした。

⑵取組内容

①不審者対応避難訓練（7月30日）

・光市少年安全サポーターの方に指導・協力をいただき、日時等を事前に告げない不審者対応避難訓練を行った。サポーター（不審者役）と事前に３つの状況設定を行い、当日そのうちの一つを実施していただいた。

・運動場にいる児童に不審者が近付いたため、教員が児童に指示を出し、不審者への対応を行った。その間児童は職員室に報告し、他教室への連絡及び避難をした。

・異変に気付いた職員がさすまたで対応するとともに、警察への連絡・引き渡しを行った。その後、光警察署の方とサポーターの方から、児童へ不審者に出会ったときの対応方法、教職員へさすまたの指導をしていただいた。

・翌日、「ALSOKあんしん教室」を実施し、ロールプレイングを主体とした危機回避の心構えについて学んだ。

児童と不審者の間に入り
教員が出ていくように促した→

↑児童は校舎へ逃げ込み職員室に連絡。
↓連絡を受けた職員がさすまたで対応。110番通報によって警察官の到着・引渡し。

②火災対応避難訓練（11月4日）

・突然、非常ベルが鳴った場合の自分の行動のとり方について考え、判断させることを目的に日時等を事前に告げない火災避難訓練を行った。

・休み時間に非常ベルが鳴った後、児童は「放送を聞く」「先生の指示を聞く」と判断し「お・は・し・も」の約束を守り運動場へ避難した。教員には訓練の目的を事前に伝えその場で判断し、連携をとりながら児童を迅速に避難させた。

③今後の実践

・日時等を事前に告げない地震対応避難訓練や、専門家と連携した防災出前授業を行う。

3　成果と今後の課題等

⑴成果

教職員が連携しながら的確な判断、指示、誘導をし、全員を安全に避難させることができるかを確認するための訓練であった。教員同士が指示、引率、確認等の分担をすることができた。また、児童には災害はいつ起こるかわからない、だからこそ常に心の準備（人の話をよく聞く、落ち着いて行動する）が必要であることを事後指導し、訓練でできないことは本当の時にはできないという考え方をもつことができた。

⑵課題

児童は、これまでの避難訓練の経験をもとに自分で判断して行動することができるかどうかが試された訓練であった。放送をきちんと聞き情報を得ることはできたが、聞いた情報を踏まえて正しく避難行動をとることには課題が残った。（例：校舎内の火災で運動場から校舎に戻ろうとした）自分で考え正しい判断で行動するには、今後も様々な状況を設定し児童に判断させる機会を設けることが必要である。

取　組　名	地域力を活用した防災対応能力の向上を図る防災学習・防災訓練の実施		
特　　徴	学校・家庭・地域が連携して防災学習・防災訓練を実施		
学　校　名	宇部市立神原小学校	期日	令和2年10月13日～29日

1　ねらい

○　学校・家庭・地域が連携して防災学習・防災訓練を実施して、防災体制の充実や防災意識の向上を図る。

○　自分の命は、自分で守ることのできる子どもを育てる。

2　概　要

神原校区自主防災会、宇部市上下水道局、宇部山陽小野田消防局、宇部市地域福祉・指導監査課、宇部市防災危機管理課、下関地方気象台、神原小学校運営協議会等と連携して、防災学習・訓練を実施した。

防災学習・防災訓練の内容

① １年　煙避難訓練（宇部中央消防署）
② ２年　防災グッズの製作、火災予防啓発（神原地区自主防災会、宇部中央消防署）
③ ３年　避難所開設体験（宇部市地域福祉・指導監査課）
④ ４年　地震・災害のお話（宇部市防災危機管理課）
⑤ ５年　災害（台風・大雨）から身を守るお話（下関地方気象台）
⑥ ６年　水の大切さのお話、給水車からの給水体験（宇部市上下水道局）

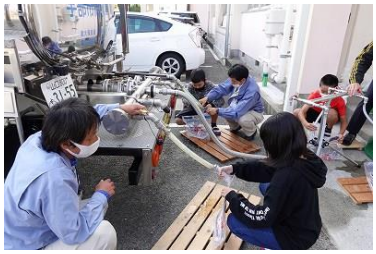
〔煙避難体験〕

〔防災グッズの製作〕

〔避難所開設体験〕

〔地震・災害〕

〔台風・大雨〕



〔給水車からの給水体験〕

3　成果と今後の課題等

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、10月に学年ごとの分散実施とし、学校・地域が連携・協働して防災学習・防災訓練を行った。宇部市地域・保健福祉チームを中心に、関係機関との連携をもとに、事前に関係各所との入念な打ち合せや会場の確認を行った。

煙避難、段ボールの間仕切り体験、身近な物を使った防災グッズの作製、重さ６キログラムの水の入った袋を背負っての下校など、貴重な体験をすることができた。また、宇部市の河川の様子や災害が起きた時の避難所の様子を聞くことにより、防災への意識が高まり、災害時にどのように対応すればよいかを学ぶこともできた。本年度は５年生の学習で下関地方気象台に協力を依頼し、実施した。ワークショップ型での学習も可能であることから、次年度へ向けて検討したい。

今後も継続して、このような防災学習・訓練を学校・家庭・地域が連携して実施すると共に、来年度は地域住民も可能な限り参加できるよう、新型コロナウイルス感染症の感染状況を確認しながら計画を進める予定である。

取 組 名	「学校の避難訓練」と「地域ぐるみの防災キャンプ」の共同実施		
特　　徴	学校の避難訓練と学校・地域・関係機関が連携した防災キャンプを組み合わせ、災害に備えたより効果的な取組をめざした。		
学 校 名	美祢市立於福小学校	期日	令和２年９月１８日(金曜日)

1　**ねらい**

○　災害に遭遇しても自分の命を自分で守ることができるよう、児童の自己防災能力を育てる。

○　学校・地域・関係機関が連携して児童の安全を確保できるよう、それぞれの危機管理能力を高める。

2　**概要**

(1)　取組の経緯

本校は南北を山に挟まれた谷の部分に立地しており、土石流及び急傾斜地の崩壊特別警戒区域である。過去の大雨の時には、大量の水や土砂が校地内を流れたことがある。近年、砂防ダムが建設されたが、土砂災害の危険が無くなったとは言えず、災害に備えた訓練は必須である。

今年度「地域ぐるみの防災キャンプ」を実施するにあたり、学校避難と避難生活の流れを体験する活動を仕組んだ。

(2)　取組内容

大雨洪水警報・土砂災害警戒情報が出され、学校裏の山で土砂崩れが発生する危険が高まったという想定で避難を開始した。全児童が安全に校舎外に出たことを確認した後、学級ごとに約１．２㎞離れた於福公民館に徒歩で避難した。

公民館到着後は、「地域ぐるみの防災キャンプ」に参加し、於福中学校の生徒とともに災害ボランティアによる講義「自分の命は自分で守る」を受講し、続いて市防災危機管理室と消防本部による避難所体験として段ボールベッド作り・アルファ化米を使った非常食の試食を体験した。

(3)　当日の流れ

12:45　避難訓練開始　玄関前で児童の安全確認　於福小学校出発

13:05　於福公民館到着　児童の安全確認　避難訓練の振り返り

13:30　地域ぐるみの防災キャンプ

開会行事、講義、段ボールベッド作り、非常食試食、閉会行事

16:30　解散

3　**成果と今後の課題等**

(1)　成果

避難訓練では全児童が黙って迅速に避難することができ、非常時に備えたよい経験となった。「地域ぐるみの防災キャンプ」は、当初、１泊２日で実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症対策のため、半日日程に変更して実施した。予定より内容は限られてしまったが、児童は「災害が起きたらどこに避難するか家族と話しておきたい」「避難する時は、近所の人に一声かけようと思う」「避難所のルールを守りたい」「段ボールベッド作りで協力することの大切さが分かった」等、訓練や講義、体験を通して防災意識を高めることができた。

参加した大人にとっても「コロナ禍における避難」という今日的課題に取り組むよい機会となった。

(2)　課題

本校の児童は大変素直で、訓練にも真面目に取り組むことができるが、自分から積極的に行動することは苦手である。非常時に自分の命を自分で守れるよう、訓練時だけでなく、日々の学校生活の中で指導を続けていきたい。

災害ボランティアの講義

協力して段ボールベッド作り

ベッドの寝心地チェック

予想以上においしかった非常食

中学生を中心に振り返り

取　組　名	自分たちの命は自分たちで守ろう ～よしみ地区合同：地域ぐるみで行う合同地震・津波避難訓練～		
特　　徴	地域防災士による防災教室と地域みんなで行う避難訓練		
学　校　名	下関市立吉母小学校	期日	令和2年10月28日（火曜日）

1　ねらい

○　地域ぐるみで防災訓練をすることにより、海に隣接する海抜の低い地域としての防災意識と近隣同士で助け合う連帯感を高め、学校と諸団体が連携して防災及び安全な避難ができるようにする。

○　自分の命を守るだけでなく、学校や地域の安心・安全を支える一員としての意識をもち、適切な行動がとれるようにする。

2　概要

(1) 取組の流れ

吉見地区まちづくり協議会・吉見中学校区4校・2園が「よしみ地区合同地震・津波避難訓練」を同時実施するようになり、9年目を迎えた。吉母地区では、自治連合会・消防団吉母分団・吉母公民館・下関市防災士連絡会が連携して行った。

本校では今年度も下関市防災士連絡会長である自治連合会長による全校防災教室を実施。避難訓練の時刻は告げず、掃除時間に実施。吉母公民館に二次避難した。

(2) 当日の流れ

・ 8 時 20分から8 時 35分まで　防災教室開催
・13 時 40分　震度６地震発生(想定)
・13 時 41分　各自で安全な場所に避難
　　【第1次避難】放送により運動場中央へ
　　全児童の避難の様子について確認
　　校長による講評
・13 時 45分　大津波警報発令（漁協サイレン）
　　【第2次避難】吉母公民館へ避難
・14 時　　下関市防災士連絡会長より講評
・14 時 15 分　まとめの会 避難訓練終了

3　成果と今後の課題等

今年度も時刻を告げず、掃除時間に行ったため、各自がその場に合った判断をして避難する訓練となった。第一次避難後、全児童に、どこで、どのように、どんなことに気を付けて避難したかを発表し合う振り返りの時間を取った。防災教室をはじめとする事前指導により、それぞれが正しく判断して避難することができていた。今年度は感染予防のため、地域での特別な活動は行わなかったが、児童は地域の方々と避難訓練をすることに大きな意義を感じていた。

課題としては、昨年度に引き続き、公民館を避難所としているが、津波が10mを超える場合を想定した最終避難場所の設定や、感染症対策を含めた避難所生活等について協議し、学校・家庭・地域で共有する必要がある。また、中学校に兄姉がいる児童について、中学校とは避難場所が異なるため、引き渡しについても今後、検討が必要である。

取　組　名	安全マップづくり　（地域の方・保護者と連携し、３年生が安全マップの作成を行い、作成後、３年生が２年生への安全教室を実施する）		
特　　徴	地域の方、保護者、児童が協力して校区内の安全点検、安全マップの作成に取り組み、地域の安全を見直し、安全に対する意識を高めることができた。		
学　校　名	下関市立向井小学校	期日	令和2年11月26日(木)

１ ねらい

・ 校区内の安全点検を実施し、安全マップを作成することを通して、児童が危険箇所等を見極める力を身に付け、交通安全に対する意識を高めることができる。

・ 地域の方や保護者、児童が協力して校区内の安全点検を実施することにより、地域の安全意識を高揚することができる。また、この活動を広報することで登下校中の安全に留意する環境をつくり出すことができる。

２ 概要

学校運営協議会、ＰＴＡと連携して、３年生が校区内の安全点検、安全マップの作成をした。 地域の方、保護者の方と一緒に校区内を１１の地区に 分けて点検した。けがをしそうな場所やひとけのない場所などを写真に撮ったり、メモをとったりした。日頃歩いている通学路や遊んでいる所も、改めて安全意識をもって見渡してみると、大人と子どもでは安全に対する視点が違うことに気付いていた。学校に戻ってから、それぞれの地図に調べた結果を記入した。

校区内の安全点検

安全マップの作成

完成した「安全マップ」は、２年生の児童に知らせ広めるために、１２月１６日（水）にプレゼンテーションし、調べたことを共有した。

調べたことの共有

３ 成果と今後に向けて

・自分の住んでいる地域の危険箇所を現地調査したことで、日頃意識していなかった危険箇所を見つけることができた。

・子どもの目線、大人の目線の両面から危険箇所を調査することができ、子どもだけでは気付かない危険箇所を知ることができた。

・２年生に危険箇所を分かりやすく伝えることで、３年生自身の防犯意識、安全意識が高まった。

・今後も継続的な活動にしていくために、協力体制の確立や役割の明確化、防災関係のコンテンツの整理などが必要である。

取　組　名	三隅地区防災避難訓練（全校）		
特　　徴	校種・地域・関係機関等と連携した取組		
学　校　名	長門市立明倫小学校	期日	令和2年10月20日（火曜日）

1 ねらい

○ 三隅地区で起こりうる災害に対する避難行動を，地域ぐるみで取り組むことにより，災害発生時における対応能力の向上と防災意識の高揚を図る。（三隅地区）

○ マニュアルに沿って適切な対応を行うとともに，事後の検証を通して，より安全な学校づくりへの積極的な参画をめざす。（本校）

2 概要

(1) 災害の想定

午前9時45分，日本海見島北方沖を震源とするM6.2の地震が発生し，三隅地区で震度5弱を観測する。地震発生後の午前9時48分に津波警報が発表され，直ちに「避難指示（緊急）」が発令された。

警察官による避難誘導

(2) 避難場所

第一次 明倫小学校 運動場

第二次 ふれあいパーク三隅 第2駐車場

(3) 訓練条件

① 通信インフラ損傷なし。（事前に避難経路を指示）

② 建造物の倒壊はなし。

③ 道路の損傷あり。（事前に通知）

(4) 当日の流れ

9:45 地震発生（校内放送での合図），命を守る行動

9:46 第一次避難の指示（校内放送）

9:50 第一次避難終了（校長への報告終了）

9:51 三隅支所より避難指示（緊急発令）※想定

9:52 状況説明，第二次避難開始

10:05 第二次避難終了（災害対策本部への報告）

10:10 全体会（主催者挨拶，講評）

10:25 終了，解散，帰校

上学年と下学年のペアでの避難

3 成果と今後の課題等

(1) 成果

綿密な計画が立てられ，事前に詳しい説明を受けたことで，不安なく取り組むことができた。校内では，情報共有と児童への事前指導を徹底したことにより，教職員も児童も落ち着いて行動し，概ね適切な対応をすることができた。二次避難では，上学年児童が下学年児童のことを思いやる様子が見られ，自助だけでなく共助の力が育ってきていることを実感した。また，危険箇所で，警察署や公民館等関係機関によるサポートがあったため，安心して避難することができた。実際の災害においては，さらに危険性が高まるため，今回のような協働体制が必須であると感じた。全体会では，短時間で的確な指導助言があり，活動の評価と振り返りを行うことができた。

避難終了後の講評

(2) 課題

一次避難の際，少数ではあるが，「お・は・し・も」の約束が守れなかった児童がいたことで，繰り返し指導することに加え，訓練の積み重ねが必要だと感じた。また，後の検証において，地震の際には津波発生に伴う二次避難を想定して，一次避難の場所を変えた方がよいという意見が出された。今回の反省を踏まえて協議し，マニュアルの見直しを図っていきたい。今年度は天候に恵まれ訓練を実施することができたが，昨年度は悪天候のため中止となっている。しかし，今回実施してみて，地域ぐるみの避難訓練の必要性を実感した。今後も，災害の想定や避難経路等を変えて訓練を重ね，児童及び教職員の安全意識の高揚や危機対応力の向上，校内や地域における組織活動の充実を図っていきたい。

取　組　名	緊急時引き渡し訓練		
特　　徴	土曜参観日を活用した緊急時引き渡し訓練		
学　校　名	岩国市立玖珂中学校	期日	令和元年６月２３日（日）

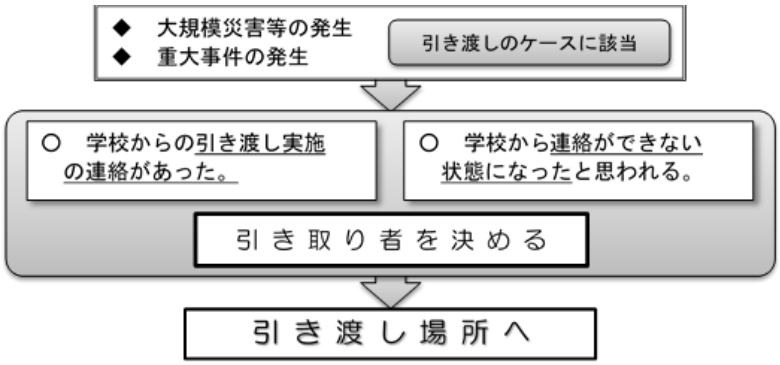
１　ねらい

大規模災害発生時等を想定した生徒の引き渡し訓練を実施することにより、大規模災害や重大事件の発生といった緊急事態に際しても冷静に対応できる知識や技術を身に付けるとともに、非常時に自らの生命を守るための方法等について家庭内で話をするきっかけをつくる。

２　概　要

※　各家庭に保護者用マニュアルを事前に配布し、基本的な内容を周知するとともに、「引き渡しカード」を作成し緊急時の対応について準備をする。

＜15：10＞保護者教育講演会終了
＜15：20＞一斉配信メールで「引き渡し（訓練）」連絡
＜15：25＞保護者への引き渡し開始
＜15：45＞保護者への引き渡し終了
（保護者が参加できない生徒は下校）



引き渡し訓練の様子

３　成果と今後の課題等

引き渡し訓練当日に向けて、「引き渡しカード」の準備等を進めていく中で、生徒・保護者、教職員の意識啓発が促進されたことが、成果として挙げられる。

一方で、今後検討が必要であると思われる課題は、実際に緊急事態が発生した時の対応である。今回の訓練は土曜参観日を活用した引き渡し訓練であり、「生徒の身柄を確実に保護者に引き渡すこと」に焦点化した訓練であった。既に保護者の多くが校内におられたこともあり、引き渡し開始から 20 分後には、ほとんどの生徒が保護者と一緒に下校することができた。しかし実際には、訓練のように簡単にはいかない。想定される事態としては、次のようなことが考えられる。

・被害状況が甚大であり、交通網が遮断されてしまい、引き取りの保護者が来校するまでにかなりの時間を要する、あるいは来校することができない。
・事前に決めていた引き取り者が来校できないため、急きょ別の人（友達の保護者等）が身柄を引き取りに来る。
・被害状況が甚大であり、校舎内で倒壊の危険があるなど、訓練で使った引き渡しの動線が確保できない。

定期的に訓練を実施することで、緊急時の基本的な対応について全員が共通理解を図るとともに、それぞれが事態を把握し適切な判断ができるように経験を重ね、生徒も保護者も教職員も、自分の生命を自分で守る存在になるように努めたい。

取 組 名	地震発生時避難訓練（校外への避難）と防災学習		
特　　徴	大島中学校、社会福祉施設さつき園、大島中学校運営協議会が連携する避難訓練と、山口県大島防災センター長を講師に招いての防災教室		
学 校 名	周防大島町立大島中学校	期日	令和２年９月２４日(木曜日)

1　ねらい

○　巨大地震発生を想定し、地震発生時に安全を確保し、揺れが収束したら落ち着いて迅速に安全な場所に避難できるようにする。

○　訓練を通して生徒の自然災害と防災に対する意識を高めるとともに、教職員の危機管理能力の向上を図る。

○　社会福祉施設さつき園と同日に時間差で、同じ場所に避難訓練することで、地域と連携した危機意識の高揚を図る。（新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、今年度は時間をずらして訓練を行う。）

2　概要

（１）取組の経緯

震度６弱の巨大地震南海トラフ地震で津波が発生するおそれのある場合を想定して、より高い場所に避難するために地域と連携して、社会福祉施設さつき園やしろ第２ホームへ避難する。周防大島町は少子高齢化が深刻な問題となっており地域で助け合うことやボランティア活動への意識が高い土地柄である。

「地域とともにある学校」として、隣接する社会福祉施設さつき園とは、フライングディスクの交流や運動会の競技等さまざまな行事でのふれあいがあり、連携して避難をすることで地域の一員としての責任や思いやりの教育も意図している。

①

（２）当日の流れ

１０：３５　地震発生の放送後すぐに身を伏せ、机の下にもぐる。
１０：４０　【第一避難完了】校内　体育館前　①
１０：４５　【第二避難場所への移動開始】　②
１１：００　【第二避難完了】さつき園第二やしろホーム　③
１１：０５　【別ルートで学校へ戻る】　④
１１：２０～１２：１０
山口県大島防災センター長を講師としての防災学習　⑤
１２：１０～１２：２５
教室での振り返りシートの記入

②

3　成果と今後の課題等

（１）成果

新型コロナウイルス感染拡大防止のために３密を避けての避難となったため、さつき園との交流はなかったが、無言で移動する際に、５分後に移動を開始するさつき園の緊迫したアナウンスの様子や職員が一生懸命に誘導している様子を実際に見ることになった。冷静に行動することの大切さや、今年度一度も交流をしていないさつき園の方々の様子から、生徒自身の避難の際の役割や周囲の人々とのつながりについても考えることができた。学校に戻ってからの防災学習も、専門的な知識や根拠に基づいたもので、更に意識を高めることに効果的であった。

③

④

（２）課題

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、さまざまな行事が中止になったが何とか工夫をして命を守る防災訓練について実施できた。新しい生活様式での防災については、接触を避けたり適切に消毒をしたりすることも重要なので、その点のシミュレーションも必要である。また、地域との連携や感染防止についても新たな取組を模索し、工夫を重ねてより実効性のある安安心・安全な学校づくりをしたい。

⑤

取 組 名	各学級での夏季休業前の交通安全指導		
特　　徴	自転車事故防止につながるＫＹＴ危険予測学習		
学 校 名	下松市立久保中学校	期日	令和2年7月30日（木曜日）～ 8月4日（火曜日）

1　ねらい

○ 交通安全の意識をそろえる
　～危険と怖さの意識をそろえる～

○ 皆が同じように危険だ、怖いと感じる危機意識をもたせる。

学習の様子

2　概要

（１）取組の経緯

・交通安全指導の充実をめざすための取組を模索する。
・中学生の多い、自転車事故防止についての取組を行う。
・夏季休業で、開放感が高まる前に実施する。
・ＫＹＴ危険予測学習の取組をする。

（２）取組の内容

・パワーポイント教材を準備して、同じ内容で授業を行う。
・3～4枚の資料を使って、グループ学習を行う。
・それぞれの資料について発表することにより、学習内容を共有する。
・まとめとして、自転車事故の原因を確認した後、時間に合わせてまとめを行う。
　①ＤＶＤを観て、危険予測をしながら振り返る。
　②「自転車安全利用五則」「交通の方法に関する教則」より、自転車の安全利用に関するものを利用してまとめる。
・最後に、自転車は、被害者にも加害者にもなることを確認して終わる。

3　成果と今後の課題等

○　ＫＹＴ危険予測学習を行うことにより、自転車運転時の危険予測とその対処法について確認できた。

○　学級でグループ学習を中心としたことで、生徒が積極的に学習に参加できた。

○　中学生の交通事故は、自転車事故が多いが、それを自分のこととして受け止めることを、今後も呼びかけていく。

○　今回は、自転車乗車中の事故についてのＫＹＴ危険予測学習であったので、今後、歩行中の事故についてのＫＹＴ危険予測学習にも取り組みたい。

○　全校で行う交通安全指導でも、ＫＹＴ危険予測学習を取り入れていく。

取 組 名	じぶんごと ～ for myself ～ （地域の実態を踏まえた防災への取組）		
特　　徴	・山口大学工学部創成科学研究科出前講座 ・光市防災危機管理課（クロスロード）出前講座 ・市長と語ろう青少年の集い（市長、地域住民を交えた話し合い）		
学 校 名	光市立浅江中学校	期日	令和2年5～11月

1　ねらい

○　日常生活のさまざまな場面で発生する災害の危機についての理解を深めるとともに、防災に対する正しい知識を身に付け、災害の際に自分たちも浅江地域の一員としてとるべき行動を正確に判断し、行動できる力を育成する。

2　概要

(1) 取組の経緯

本校は、島田川沿いの凹みの地域にあり、平成30年の7月の西日本豪雨の際には、グラウンドが水没するなどの浸水害に遭っている。そこで本校２学年は、災害の危険性や防災に関する正しい知識を身に付け実践力を養うために「総合的な学習の時間」等を活用して、防災に関する「学びの場」、防災について「考える場」、防災のことについて「表現する場」、防災をテーマに「議論し深める場」を設定し、学習を進めてきた。これらの取組を通して、災害発生時に自分のとるべき行動を的確に判断し、地域住民の一員として「じぶんごと」と捉えて行動できる「防災対応能力」の育成を図っている。

山口大学による出前講座

(2) 全体計画

①７月（教科）【理科】災害について学ぶ
　　【社会】ハザードマップの作成
②８月（学びの場）山口大学工学部知能情報工学科による出前講座
③９月（考える場）光市防災危機管理課「みんなの防災教室」
④10月（表現する場）文化祭でのステージ発表（２学年全体）
⑤11月（議論し深める場）市長と語ろう青少年のつどい
⑥11月（実践・振り返り）日時等を事前に告げない避難訓練

市防災危機管理課による防災教室

(3) 当日の流れ（市長と語ろう青少年のつどい）

13:30-13:40　開会行事
13:40-14:30　２年生による演劇「じぶんごと」～For my self～
14:50-15:10　クロスロード（グループ協議）
15:10-15:30　光市長から講評と講話

光市長からは、劇・クロスロード（災害時に難しい判断を迫られる様々なケースを想定）の議論の様子を見ていただき、一緒に議論にも加わっていただいた後、「『備えよ常に』という考えをこれからも大切にしてほしい」と講評をいただいた。

文化祭でのステージ発表（劇）

3　成果と今後の課題等

(1) 成果

防災について学んだことを表現する場、議論する場を設けたことにより、生徒一人ひとりが「気づき、考え、行動する」ための深い学びができた。また、クロスロードへの取組を通して、市長や地域住民と災害時に大切なこと等を語り合えたことで、防災に対する当事者意識の醸成につながった。

市長と語ろう青少年のつどい

(2) 課題

上記の一連の取組により、水害を想定とした防災への意識は高まったものの、水害以外の災害を想定した防災学習や訓練の計画的な実施が必要である。また、コロナ禍を想定した避難所運営についてマニュアルづくりに留まらない想定訓練の実施が必要である。

避難訓練後の振り返り

取 組 名	自助から共助へ		
特　　徴	「専門家等と連携した防災出前授業」の活用		
学 校 名	防府市立小野中学校	期日	令和2年7月17日(金曜日)

1　ねらい

(1)専門家等と連携した防災出前授業

・土砂災害や河川氾濫などの自然災害の発生メカニズムについて理解を深め、防災への意識を高める。

・シェイクアウトやグループでのディスカッションを通して大規模な災害が起こったときに備え、さまざまな知識やスキルを習得する。

・自助や共助の大切さを学び、地域防災避難訓練において意欲的に活動できるようにする。

(2)小野地域連合自治会防災避難訓練への参加予定

・大規模な災害が起こったときを想定して、地域全体での訓練に参加し、さまざまな知識やスキルを習得する。

・防災出前授業で学習したことを訓練の場で生かす。

シェイクアウト訓練

Ｙes・Ｎo カードで意思表示

グループディスカッション

2　概要

(1)取組の流れ

近年、本校は防災ボランティア活動講演会や防災出前事業などを実施している。今年度は、専門家と連携した防災出前授業を実施した後に地域防災避難訓練へ参加することで、理論と実践を結び付ける形での取組として計画したが、新型コロナウイルス感染拡大防止措置により、地域防災避難訓練への中学生参加は見送られ、防災出前授業の開催のみとなった。

(2)専門家等と連携した防災出前授業

①日時　令和2年7月17日(金曜日)

②講師　徳山工業高等専門学校

土木建築工学科准教授　江本晃美　様

③講話内容

授業は、「絶対に、自分で自分の身を守る」と題して、『自助ができてこそ、共助ができる』ことを中心に、小野地域で起こりうる災害を想定し、グループディスカッションを取り入れながら下記のことを学習した。

・地震発生時にとっさに身を守る行動と公助

・災害が発生する前にしておくこと

・地震の基礎知識

・水害･土砂災害時の自助

3　成果と今後の課題等

(1)成果

「自助ができてこそ、共助ができること。そのためには、早めの避難行動が必要なこと。」についての理解が進んだ。また、佐波川断層や周防灘断層帯を震源とする地震を想定することなど、豪雨災害以外の自然災害について理解を深めることができた。

(2)課題

予定していた自治会の防災避難訓練が中止となったため、知識理解のみにとどまり、実践力の育成につなげることができなかった。今後は、校内の避難訓練等を通し、可能な限り「自助」の能力を高め、「共助」につなげていきたい。知識を実践力まで高め、地域の一員として意識や思いを育んでいきたい。

取 組 名	サバイバルキャンプ　ｉｎ　琴芝		
特　　徴	琴芝地区コミュニティ推進協議会が主催（協力：72時間サバイバル教育協会、宇部市消防局）する宿泊型の防災訓練に、ボランティアスタッフとして上宇部中学校の生徒が参加した。		
学 校 名	宇部市立上宇部中学校	期日	令和２年11月28日(土),29日(日)

1　ねらい

〇防災教育の視点

地域の防災訓練に参加することにより、現在及び将来に直面する災害に対して、救出活動（公助）だけでなく中学生を含めた地域がお互いに助け合うこと（共助）の重要性について理解を深め、的確な思考・判断に基づく適切な意志決定や行動選択ができるようにする。

〇コミュニティスクールの視点

地域の防災訓練にボランティアスタッフとして参加することにより、災害時だけでなく、日頃から安全な地域社会づくりへ進んで参加しようとする態度を養う。

スタッフミーティングの様子

2　概要

(1) サバイバルキャンプの体験のスローガン

・いつもと違う環境を楽しもう
・助け合うことを経験しよう
・危ないことに気づく力を身に付けよう
・初めてのことにもチャレンジしてみよう
・新型コロナウイルス感染予防を考えよう

(2) 日程表

１１月２８日（土）		１１月２９日（日）	
時間	活動内容	時間	活動内容
8:30	受付	6:30	起床
9:00	はじめの集い	7:00	ラジオ体操
9:30	シェルターの必要性、テントタープの構造の理解	7:15	朝食
		9:00	防災訓練
		10:00	おわりの集い
13:00	昼食	10:30	解散
13:40	ロープワーク		
14:30	シェルター製作		
17:30	夕食		
18:30	レクリエーション		
20:30	フリータイム		
21:00	就寝		

72 時間サバイバル教育協会による講義

シェルター製作

3　成果と今後の課題等

今回、中学生は地域の防災訓練に参加する小学生の手伝いをするためのボランティアスタッフとしての参加であった。しかし、シェルターの製作やロープワーク講習、煙道体験や放水訓練などの活動に地域の人々や小学生とともに参加することで、災害時において自力で生き抜く力（自助）と周りの人を助ける力（共助）の重要性を学ぶ有意義な機会となった。

来年度以降は、地域社会の一員として防災訓練そのものに参加させたいと考える。

取　組　名	よしみ地区合同地震・津波避難訓練		
特　　徴	よしみ地区の保育園・小学校・中学校と水産大学校、海上自衛隊、消防署、消防分団、警察署、支所、公民館と地域住民が一体となって行う地震・津波避難訓練		
学　校　名	下関市立吉見中学校	期日	令和２年１０月２７日（火）

１　ねらい

○　誰もが地震・津波に遭遇することがあるという危機意識を高め、生命・身体の安全維持のための適切な行動ができるようにする。

○　地域ぐるみで訓練することにより、海抜の低い地域として防災意識を喚起する。

○　高学年児童や中学生は、自らの命を守り、安全を確保しながら、地域の一員として地域を守る行動がとれるようになる。

２　概　要

訓練の様子①

◇参加者（合計約６００名）

（１）園児･児童･生徒・学校関係

①　吉見保育園　　②　二葉保育園

③　吉見小学校　　④　吉母小学校

⑤　吉見中学校

（２）地域

①　吉見自治連合会　　②　吉見支所　　③　吉見長寿会

④　吉見消防分団　　⑤　水産大学校　⑥　よしみ子ども見守り隊

（３）公的機関（訓練支援）

①　下関市警察署　　②　吉見駐在所　　③　下関市消防署

④　下関市北消防署　⑤　海上自衛隊下関基地隊　　⑥　下関市役所（支所・公民館）

◇　避難場所と避難対象

（１）よしみ近隣公園：園児･児童･生徒、地域の方

（２）水産大学校多目的学生教育棟：永田本町住民

（３）西光寺境内：吉母地区

（４）足の不自由な近隣の高齢者：吉見中表門付近集合　のち　自衛隊車両で避難

◇共通訓練手順

訓練の様子②

（１）地震発生仮定時刻　１３：３５

（２）津波発生仮定時刻　１３：４５

（３）避難完了後全体集会　反省・講話

（４）解散

◇　避難場所別訓練手順

（１）公園に避難（園・学校・地域関係）

①　地震発生 →対応行動　→　園・学校内避難（一次避難）

１３：３５　　１３：３７

→津波警報（消防車サイレン）　→高所への避難（二次避難）

１３：４５　　１３：５８

②　避難場所　　運動場　→　よしみ近隣公園（グラウンド）

③　全体集会　１４：０５
（ア）司会進行：よしみ地区まちづくり協議会　安全・健康・教育部会部長
（イ）内容　下関市北消防署講評　海上自衛隊下関基地隊講話・演習
※新型コロナウイルス感染症予防のため中止
（ウ）解　散
（２）水産大学校多目的学生教育棟に避難
①　同時刻に行う。
②　水産大学校と永田町自治会との協議により決定。
校区のため事務職員１名参加。
（３）西光寺境内に避難（吉母地区）
①　同時刻に行う。
②　具体的な手順は吉母小学校を中心に吉母地域で決定。
（４）引き渡し訓練
中学校では、同訓練終了後引き渡し訓練を実施。

引き渡し訓練の様子

３　成果と今後の課題等
今年で９年目を迎える地域を巻き込んだ本避難訓練は地域の中でもかなり定着してきており、地域住民を含め約６００名が参加して行われた。開始当初は中学校が主体となり活動してきたが、地域の「よしみ地区まちづくり協議会」が主催となり、中学校区内の保育園・学校が協力している。
「押さない、走らない、しゃべらない、戻らない」の「お・は・し・も」を守ることを目標としているが、津波を想定し国道を渡った後は全力で走って高台に避難させた。また、本年度はコロナウイルス感染予防のため、中止となったが、昨年は避難後、消防署からの講評後、海上自衛隊下関基地隊から土嚢作成の実演を行っていただき、訓練とあわせて防災、特に地震・津波災害に対する生徒の意識は高まっている。
今後の課題としては、放課後や休日等の災害に備え、自分の住んでいる地域の避難所を確認させ、避難経路を自分でまとめさせることで生徒の対応力、実践力の向上に努めたい。そして、卒業後どこで生活することになっても自らの命を自分で守ろうとする「命の教育」の一環として今後も継続していきたい。

取　組　名	地域の防災学習（コミュニティスクール活動）		
特　　徴	地域住民や近隣小学校と共同で防災について学習した。		
学　校　名	山口県立熊毛北高等学校	期日	令和２年８月１８日（火曜日）～ 令和２年１１月８日（日曜日）

１　ねらい

地域住民や近隣の小中学校と連携した防災学習を通して、生徒の自立貢献する力や新たなものを創造する力を育てる。また、地域と学校の連携を強化していく。

２　概　要

（１）三丘小学校防災教育授業への参加：8月18日（火）

三丘小学校で行われた防災教育の授業に参加した。公立鳥取環境大学の柚洞一央准教授の御指導のもと、地理的な観点より三丘の災害リスクについて学んだ。また、授業には地域住民によって構成される“ほっと三丘”コミュニティ協議会の方々も参加しており、地域住民と小学生、高校生、教員が一緒に防災に関するグループディスカッションも行い、防災に関する知識を深めた。

三丘小学校防災教育授業

（２）みつおまちあるき防災編：8月21日（金）

熊毛地域の防災マップを片手に、地域の避難所（熊毛総合支所、熊毛北高校、三丘市民センターケアハウス三丘）を見学し、それぞれの設備や備蓄品などの状況について説明を聞いた。避難所にどのようなものを持っていけばよいのか、どのように過ごせばよいのかを学習することができた。

みつおまちあるき防災

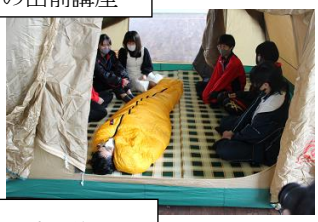
（３）周南市防災危機管理課来校：9月4日（木）

周南市防災危機管理課から講師を招き、防災出前講義をしていただいた。ハザードマップ等を見ながら、本校周辺の災害時危険箇所や防災情報の取得方法について学ぶことができた。

周南市からの出前講座

（４）防災キャンプ：11月7日（土）～11月8日（日）

本校で避難所生活を体験する防災キャンプを実施した。実際の避難生活を想定して電気やガス、水道を停止し、生徒が避難生活に必要な物資を自分で考え、持参する形で行った。体育館で説明、段ボールベッドやテント設営、食事（防災食）の指導、ツナ缶でランプづくり、水の濾過の仕方、生徒会生徒による発表、公立鳥取環境大学の柚洞一央准教授の災害についての講義とグループディスカッションなどがあり、「防災ちえぶくろ」にまとめた。



防災キャンプの様子

３　成果と今後の課題等

生徒だけでなく、大人（教員や地域住民）も災害について考える良い機会になった。生徒会と有志の取組ではあったが、成果は大きかった。防災についての意識が向上したこと、ライフデザイン科・普通科との横断的な取組につながること、主体性の育成・小中学生との関わりができること、地域の方とのつながりが深まることである。熊毛のまちづくりに向けてテーマを見つけて考えさせていきたい。全校生徒に広げていくために教育課程に組み込んでいきたい。

取　組　名	防災避難訓練		
特　　徴	南海トラフ地震を想定した防災避難訓練を日時等を事前に告げない形で行う。		
学　校　名	山口県立西京高等学校	期日	令和２年 12 月２日（水曜日）

１　ねらい

○　火災や地震などの災害時における避難を安全かつ迅速に行えるよう、生徒・教職員の防災意識を高める。

○　訓練を通して、非常時の避難経路・避難場所の決定までの方法、教職員のとるべき行動を確認する。

２　概要

（1）取組の経緯

西京高等学校では、１年に２回の避難訓練を実施しており、前期は豪雨災害を想定した訓練を行った。過去には不審者対応などの訓練を行っている。この度はその経験を生かし、日時等を事前に告げない形で、南海トラフ地震を想定した訓練を行った。

（2）取組内容

正午に教室で活動中、南海トラフ地震が発生したことを想定した。瀬戸内海沿岸では大規模な津波発生。地震の影響により、化学講義室で火災が発生している。また、校舎内で倒壊場所があり、そこは通れないものとして訓練を行う。なお、生徒は訓練が行われることを一切知らされていない。

（3）当日の流れ

12：00　緊急地震速報、地震警戒放送
12：03　地震発生
12：05　状況確認
12：10　避難指示
12：20　全校生徒、全職員避難完了
12：21　講評

３　成果と今後の課題等

（1）成果

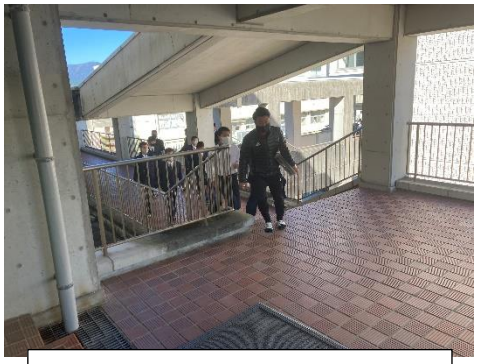
火災発生や校舎内に倒壊場所がある情報も正しく聞き取り、冷静に対応することができた。講評ではその態度を讃えるとともに、「日頃から災害に備え、自分の身は自分で守ること。」「通学路での危険個所について確かめておくこと。」について確認した。

（2）課題

本校は災害時に避難場所として開かれることがある。今回の訓練で「自助」については十分な行動がとれることが分かったが、地域の方々と共に避難所で生活する場合には、互いに助け合う「共助」の行動が必要になってくることも今後の訓練や授業の中で学習させていきたい。

建物の倒壊、津波により通行不可

この先、火災により通行不可



教員を先頭に落ち着いて避難

10 分程度で全員の無事を確認した

取 組 名	地域と連携した自転車通学路点検ワークショップ		
特　　徴	生徒・市民団体うべ交通まちづくり市民会議（通称：うべこまち）・宇部市道路管理担当職員・市民の協同により自転車通学路の点検ワークショップを行う。		
学 校 名	山口県立宇部工業高等学校	学 校 名	令和２年９月４日（金曜日）

1　ねらい

宇部市で進める車道自転車ナビマーク路線を含む、自転車通学路点検を地域の学校が連携して実施する。それにより自転車ネットワークの適正な利用や左側通行ルールの徹底などを周知啓発し、生徒の自転車利用のルール・マナー向上につながるよう、実際の通学路の状況を体験・観察して、問題点と改善策について話し合う。

2　概　要

（1）取組内容

本校生徒の代表とうべこまち会員、宇部市道路管理担当職員、山口大学学生、市民の共同により、２グループに分かれ通学路として使用される道路の試走を行う。１時間程度の試走の後、自転車通学路の点検ワークショップを行う。ワークショップでは、試走とその時の実際の映像を確認しながら、試走のルートを記した地図上に付箋を貼りながら危険な状況について話し合い、どのようにしたら安全にルールが守れ、正しい走行方法で全市民が走れるようになるかを確認した。

今後は、この結果を生徒全員に周知できるように校内での情報発信や情報共有をすることで、安全意識の向上と事故防止につなげていく。

自転車通学路の点検ワークショップ

（2）日程

16:00	生徒集合
16:00～16:15	ルート説明、注意事項、写真撮影
16:15	出発
17:05	帰校
17:15～18:00	感想、意見交換
18:00～18:20	発表コメント
18:30	閉会、片付け

3　成果と今後の課題等

実際の通学路を地域の方と共に走ることで、危険な箇所や危険な状況を学ぶことができた。逆走の危険性について、怖かったという生徒もおり、危険行為について十分に感じ、学ぶことができたと考えている。

今後は、生徒全体に経験したことを共有して、学校としての自転車マナーの向上を意識付けたい。

取 組 名	新型コロナウイルス感染症流行時の心肺蘇生法		
特　　徴	１年次生の「保健」授業における応急手当の応用		
学 校 名	山口県立下関西高等学校	期日	令和２年８月２８日(金曜日) ９月１１日(金曜日)

1　ねらい

○　心肺蘇生法の基礎知識を学び、いざという場面に遭遇した場合、バイスタンダー(※救急の現場に居合わせた人)として救命の連鎖の一員となれるようにする。

○　新型コロナウイルス感染症の流行が収まらない現在、心肺蘇生法をどのように行えばよいのかを厚生労働省が示した指針に沿って行えるようにする。

心肺蘇生法についての講義

2　概要

(1) 取組の経緯

・新型コロナウイルス感染症予防のため、授業再開が５月２５日となりステイホームが長く続いた結果、運動不足や暑熱順化に対応する必要があった。このことから、保健の年間指導計画を変更し、夏季休業前後に応急手当の単元を実施することとした。

・例年は、下関市消防組合職員の派遣を依頼し、講習を行っていたが、感染症予防対策として、今年度は講師を招聘した教職員講習及び授業での講習を中止した。

・コロナ禍における応急手当は教科書にはないが、内容を現在の状況に沿って教える必要があるため、発展させた授業を展開することとした。

メトロノームを活用したモデル実演

(2) 取組内容

・講義では、教科書に加え、「感染予防のため流行下では人工呼吸を行わない」とする厚労省の指針改定に触れた新聞記事を用いて、流行時の救急蘇生の在り方にも留意させた。

・実習では、教員によるモデル提示とともに、胸骨圧迫のテンポを体感させるため、メトロノームや音楽を活用した。

※新規採用教員も初任者研修の一環として授業を参観し、ＡＥＤの使い方等について研修した。

生徒代表による胸骨圧迫体験

(3) 当日の流れ（今回の期日は、ともに１年１組の生徒対象）

・８月２８日（金）11:50 ～ 12:40　講義

・９月１１日（金）11:50 ～ 12:40　実習（胸骨圧迫のみ）

授業参観を通して初任者研修

3　成果と今後の課題等

(1) 成果

コロナ禍の中、手指消毒等を習慣化させることにより、生徒は自分自身を感染から守る意識を身に付けてきている。このたび、「私たちがその場に居合わせたバイスタンダーとして、大切な命を救命の連鎖でいかにつなぐかで傷病者の蘇生率は変わることを理解できた。」と生徒は感想で述べていたことから、他者の命を守る意識の涵養にもつながり、大きな意義のある授業となった。また、通常の心肺蘇生法とコロナウイルス感染症予防を踏まえた心配蘇生法の違いを学ばせる授業展開を実施でき、一定のねらいは達成できたと考える。

(2) 課題

生徒４０名に対し、胸骨圧迫訓練用のモデルが本校に２体しかなく、また、トレーニング用のＡＥＤもない状態であったため、一人あたりの実習時間が少なく、ＡＥＤの装着体験もできなかった。他の施設から借用するなど、より多く実習できる体制を整える必要がある。

登校時の手指消毒

取 組 名	交通安全指導及び安全マップづくり		
特　　徴	高等部移転に伴い、全校生徒で学校周辺を散策し、危険箇所を点検する。		
学 校 名	山口県立下関総合支援学校	期日	令和2年9月10日（木曜日）

1　ねらい

○　移転に伴い、学校周辺を全校生徒で散策しながら、危険が潜んでいる箇所を点検し、通学や校外学習の際に安全が確保されるようにする。

○　学校周辺の安全マップを作成（併せて大雨による浸水想定区域を作成）し、生徒昇降口に掲示した。通学や校外学習の際などの事前指導で経路を確認することにより、生徒の安全確保及び危機管理意識の向上を図る。

2　概要

(1) 取組の経緯

今年度は新型コロナにより、前期開始が５月下旬、更に８月に高等部移転と様々な行事がある中で、少なからず移転に不安をもっていた生徒もおり、移転後の新環境への適応を図るため、暑さが厳しい中ではあったが実施することにした。

(2) 取組内容

交通安全指導は、「幡生駅方面」、「東駅方面」、「戦場ヶ原公園方面」に分かれて、安全に留意してそれぞれ活動し、後日生徒会で安全マップを作成した。

学校生活のきまりの話と事前指導

(3) 当日の流れ

9:55～10:15

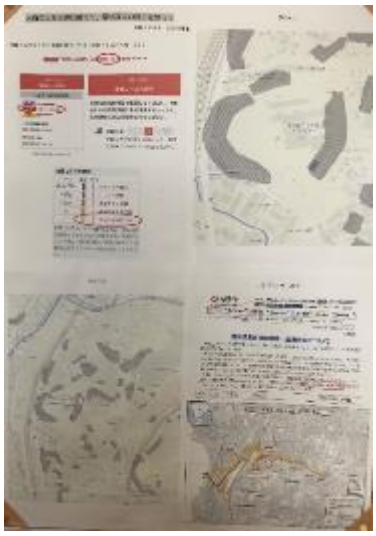
「学校生活のきまり」の指導及び事前指導

10:15～11:50

交通安全指導

交通安全指導の様子

学校周辺の安全マップ



大雨による学校周辺の浸水想定区域

3　成果と今後の課題等

(1) 成果

危険箇所の確認に併せて、声掛け事案が多い場所などに注意喚起を促すこともでき生徒指導上も大変有意義であった。また、その後のアンケート調査でも移転後の新校舎に不安を感じている生徒も散見されず、落ち着いて安定した学校生活を過ごしていることは成果と考えられる。

(2) 課題

地域との連携はゼロから作り上げていくことになるため、今後多くの取組の中で生徒を知ってもらうことから始め、地域や関係団体との結び付きを図り、協力体制を整え、安心・安全な学校づくりを進めていくことが課題である。

取　組　名	実践的な救命訓練で医療的ケア児等の緊急対応力をアップしよう！		
特　　徴	医療的ケア児の緊急時に係る教職員の資質と対応力を高める実践的訓練		
学　校　名	山口県立萩総合支援学校	期日	令和２年７月１５日（水）

１　ねらい

○　医療的ケア児の緊急時対応に係る教職員の資質・対応力の向上を図る。

２　概　要

（１）取組の経緯

今年度、全学部に医療的ケア児が在籍することになり、授業等の場面で多くの教職員が医療的ケア児と接する機会が増えている。また、新型コロナウイルス感染症等による校内での緊急時対応力を個人･チーム両面から向上させるために実践的な訓練形式で実施した。

今回の訓練では、以下の２点を重点目標とした。

○　各学部に在籍している医療的ケア児の現状と個別の緊急時対応マニュアルについて看護師による説明と質疑応答により共通理解と対応の周知を図る。

○　消防署員の指導による救命処置の訓練と数名で役割分担した救急車到着までの実践的対応訓練を通して、教職員の緊急時の対応力と危機管理意識を高める。

（２）取組内容

萩市消防本部署員２名、本校看護師２名に指導・協力していただき、医療的ケア児等への救命措置（胸骨圧迫やＡＥＤを用いた心肺蘇生）や救急車到着までの対応、医療的ケア児の現在の状況や緊急時の対応について質疑応答を交えて実践的な訓練を行った。

（３）当日の流れ（本校体育館で実施）

15:00～15:10　開会行事

15:10～15:30　医療的ケア児に係る情報提供・共有
- ・各学部在籍の医療的ケア児の状況について
- ・医師の指示書、緊急時対応マニュアルをもとにした緊急時の対応について
- ・質疑応答

15:30～15:50　救命講習（訓練）
- ・胸部圧迫、ＡＥＤを用いた心肺蘇生について
- ・救急車到着までのチーム対応（役割分担）について
- ・医療的ケア児への対応と医療行為としての制限
- ・質疑応答

15:50～16:00　閉会行事

医療的ケア児の情報共有

ＡＥＤを用いた救命講習

３　成果と今後の課題等

（１）成果

今年度、全学部に医療的ケア児が在籍することになり、今まで以上に授業等で教職員が接触する機会が増えている。また、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下にある今全教職員が医療的ケア児の現状を共通理解するとともに、緊急時に速やかにチームとして対応できる実践力と危機管理意識の向上のよい機会となった。

（２）課題

消防車到着までの流れを実践的な訓練形式で行ったことで、119番通報時の情報伝達、緊急時の役割分担、対応と医療行為としての制限など様々な課題が見つかった。

今後は、その課題を改善していくためにも、年間を通じて数回の実践形式の訓練を行うなどの時間を確保することで経験値を上げ、全教職員の危機対応力の向上を確実に図っていきたい。